

特集

まもなく開演



Hira
Mikijiro

11月公演「エレジー」主演
平幹二朗さんに聞く

役が、平幹二朗を選ぶ。

—そもそも、演劇の世界に入ろうと思われたきっかけは？

恥ずかしながらぼくは、演劇青年がもつような、芸術的、政治的な意欲をもっていたわけではありませんね。広島市に住んでいたんですが、原爆の1年前、6年生のときに田舎に疎開しました。唯一、そこで観られる芸能が映画でした。それで映画監督に憧れていたんですが、数学が苦手なので、普通の大学には行けないと思ってました。そんなとき高校の演劇部の部屋で、俳優座養成所の紹介が載っている雑誌を見つけたんです。この学校

しかないなと思い、養成所を受けると言ったら、なにせ田舎のことですから先生たちにはあきれられましたね。母一人子一人の生活でしたが、母は自分がやってみなければやってみればと言ってくれたので、それで養成所を受けました。

—影響を受けた演出家、または作品についてお聞かせください。

最初は俳優座に11年間お世話になったんですが、いちばん影響を受けたのは主宰者であった千田是也さん。

男がないという家で育ったせいで、ぼくは自分を押し出して行くタイプではないんですね。学校でも手をあげるとどきどきして、なぜ、俳優になったかもわからないくらいで。俳優座にいても目立たないようにしていました(笑)。芝居でも目立たない役がつくんですね。でも、心の中ではそういう役ではなく、激しい役をやってみたいという気持ちが常にあって。千田先生だけはぼくの本質、奥にあるものをなんとなく感じてくださるのか、思いがけない役をつけてくださったんです。

—それはどんな役ですか？

俳優座の代表的な名作「千鳥」^{ちどり}という芝居で、市原悦子さんが主役の女の子「千鳥」を演じ、ぼくはその父親役に選ばれました。農村の古いしきたりのなかで、じつと息をひそめて生きている女の子の芝居、その父親の役が回ってきました。それはとってもいい役だったので、初めて俳優座の芝居を好きになりました。その後も、千田先生が演出したゲー^テの「ファウスト」で、ぼくが主役に抜擢されて、千田先生にはいちばん影響を受けました。

—ほかに影響を受けた方はいますか？

俳優座にいるときに、浅利慶太さんにラ・シヌスの「アンドロマック」という芝居に出ないかと誘われました。いまも浅利さんが提唱している「言葉をはっきり発音して日本の現代劇にはない朗唱術をつくりあげていきたい」という野心のもとに始められた芝居です。その中のユリスというギリシアの王子の役をぼくがやりまして、それがすごくショッキングで、自分がやりたかったのはこういう芝居だということを強く感じたんです。その翌年、劇団四季が15周年記念で「ハムレット」をやるから出ないか、と浅利さんから誘われました。ただ記念公演に外部の俳優が主役を演じるのはまずい、だから俳優座をやめてくれということになりました。それで、ぼくはハムレットではないけれど、「やめるべきか、やめざるべきか」(笑)と悩んだ末、やめるほうを選択して浅利さんと芝居を始めたんですね。浅利さんの芝居に7年間で7本くらい出まして、主役として堂々と舞台に君臨できるようなものを身につけることができました。ということで、つぎに影響を与えられた演出家は、浅利慶太さんですね。

—その後はどんな出会いがありましたか？

劇団四季で7年くらい経ったころ、今のように輸入ミュージカルが盛んになってきました。ぼくは一度だけ

越路吹雪さんと「結婚物語」という二人だけのミュージカルをやったことがあります。しかし、ぼくには音楽的な素養がないので、ストレートプレイで生きて行かなきやいけないと思っていたら、そのときに蜷川幸雄さんと出会いました。三島由紀夫さんの追悼公演「卒塔婆小町」という芝居で、99歳のおばあさんの役をやりまして。それが評判がよくて、それから蜷川さんと約13年くらいありとあらゆる芝居をやりました。海外公演もやりました。今も強く記憶に残っているのはギリシア悲劇の「王女メディア」、それから清水邦夫さんの「タンゴ・冬の終わりに」という芝居です。

—その後、大病をなさっています。

「王女メディア」と「NINAGAWAマクベス」の2本立てで、いよいよイギリスのナショナルシアターへ進出するという年に、ぼくは肺がんにならました。回復が遅くて、出演できなくなりました。その時、ぼくは参加できない本当の理由を蜷川さんに言えなかつたんです。パニックになるに決まっているんで。だから、ぼくが逃げたように彼は思ったんですね。それでちょっと仲が悪くなつた。そういうことがあって11年くらい経つて、周囲の人たちが壊れたままの関係はもつたない、修復したらどうかというので、最初にやつたのが1998年の「王女メディア」です。その後も「テンペスト」をはじめ何本もやりました。

—舞台以外でも、映画、テレビとさまざまな分野で活躍されていますが、思い出深い作品は？

自分を世間に有名にしてくれたのは、なんと言つても「三匹の侍」だと思うんですね。ただ、仕事として自分のなかにかちりしたものが掴めたのは、大河ドラマの「桜の木は残つた」です。原作は山本周五郎さんですが、茂木草介さんの台本がすばらしくて、人物像として自分の中に強く残っています。それまでは娯楽的な作品が多かつたんですが、シリアスなものをやれるようになりました。

—シェイクスピアの全作上演をライフワークになさっていますが、シェイクスピア作品に惹かれる理由は？

まず、台詞が起伏に富んでいます。いろんな人間のあらゆる感情を雄弁に語っている台本なので、演じがいのある役が多いですね。それに何よりも、あの時代は女優がいなかったので、男が中心になっている芝居なんですね。ぼくのような高年になると、大人の年寄りが出る芝居って少ないですから(笑)、シェイクスピアは

来る役をどう演じるかのほうが、 楽しいんですよ。

大人の男の役の宝庫なんです。その意味で今度やらせていただく「エレジー」も、宇野重吉さんにあてて書かれたものですが、おじいさんが主役なので、喜んで出していくだけです。

—この「エレジー」への思いは？

今回の「エレジー」は清水邦夫さんの作品ですが、先ほど話した「タンゴ・冬の終わりに」と「夢去りて、オルフェ」もそうで、両方とも20数年前に出していただいている。今回何よりうれしいのは、その清水作品をやれるということですね。ただ、これは宇野先生をイメージして書かれた作品で、ぼくは先生のような素朴な役はあんまりやったことがないんですよ。どつか悪い人だったり、クセのあるヤツだったり、すごい悲劇を背負つていたり、激しすぎる役が多かったんです。宇野先生のように座っているだけでいろんなものを表現する、そういう役はやつたことがないので、ぼくにはとても難しい作品だと思います。これから台本を読み込んで、いろいろ勉強しなきゃいけないなと思っています。ぼくもそういうものがやれるかもしれない、そういう年になったということで、また先生とはちがつた役をつくればいいと思っています。

—平さんの「周知の事実」という歌に「男は年をとるほど魅力的になる」という歌詞があります。まさにこの歌のようにいつまでも輝いている平さんですが、何かその秘訣はありますか？

幸いというか不幸というか、ほかの仕事をしたことがないで、職業として俳優しか知らないんですね。自分ではいわゆる天職かなと思っているので、俳優の仕事をしていると、苦労が苦労でないんですね、楽しみなんですね。長い台詞を考えたりも、自分が演じるために準備なので、いやではないんです。それと生きることに毎日一生懸命なんですね。だから、元気でいられるのは、夢中で生きているからかもしれません。

—いま、演じたい役、共演してみたい俳優さんはいらっしゃいますか？

ぼくはこの役をやりたいとか口に出して言わないけれど、運がいいのか来るんですね。



平幹二朗(ひら・みきじろう)略歴
1933年11月21日生まれ、広島県出身。俳優座では千田是也氏に師事。退団を機に浅利慶太演出の「ハムレット」に出演、新境地を開く。その後、蜷川幸雄演出の作品にも多く出演。主な作品は「王女メティア」「近松心中物語」「NINAGAWA マクベス」などがあり、海外でも高い評価を得た。その後、病を経て約10年後、蜷川氏と再会「王女メティア」「テンペスト」などを再演。新作「グリーケス」などとのコンビが復活。一方、自らが主催する(幹の会)で、シェイクスピアの全作品の上演をライフワークとし、現在10作品を数える。

➡ P.12にプレゼント情報あり

オーバード・ホール開館15周年記念公演

第35回読売文学賞受賞作

エレジー

～父の夢は舞う～

作／清水邦夫 演出／西川信廣 美術／朝倉 摂

2011年11月2日(水)3日(木・祝)

会場／オーバード・ホール

「家族」とは、「老い」とは、「きずな」とは。

今の時代を先取りするような冴え渡る筆力で

清水邦夫が演劇界の重鎮 宇野重吉にあてて書き下ろし、

1983年の初演以来、数々の賞に輝いた「エレジー」を

西川信廣の演出、平幹二朗の主演で四半世紀ぶりにオリジナル脚本でよみがえらせます。

新たなる「エレジー」にご期待ください。



Hira
Mikijiro

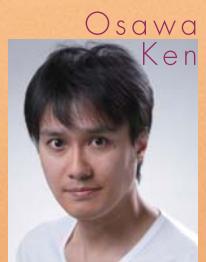


Sakabe
Fumiaki



Yamamoto
Ikuko

Tsunogae
Kazue



Osawa
Ken

あらすじ

工業高校で生物の教師をしていた平吉(平幹二郎)もすでに定年になり、その弟の右太(坂部文昭)は映画のプロデューサーのようなものをしているらしい。ある日、右太は兄の家の修繕をしにやって来た。そこへ平吉の息子の嫁・塩子(山本郁子)が訪ねて来る。草平(平吉の息子)夫婦は最初は平吉と一緒に暮らそうとしたのだが、塩子との初対面の時にひょんなことがきっかけで言い

争いの喧嘩をしたらしく、結局家を出てアパートで暮らしていた。それにも関わらず草平は平吉の家のローンを払い続けたが、最近草平が肺炎で亡くなり、その後も嫁が払い続けるのはおかしな話だと、嫁の塩子がローンの督促状を届けに来たのだ。平吉は名義替えをしてやるから、今まで通りローンを払い続けて、自分が死んだらこの家をもっていけばいい、という変な提案を塩子にする。塩子の方もついそれを受けてしまうのだが…。

➡ チケット情報はP.13まで

家族の心がゆれる。
絆を求めて、